

## 彫刻史における中国と日本（序）

山岡泰造

「日本書紀」天智九年（670）四月三十日条は、法隆寺の焼失を伝えていゝ。「夜半の後に、法隆寺に災<sup>ヒ</sup>けり。一屋も余すこと無し。大雨ふり、雷震る。」創建当初の法隆寺はこの時消滅し、現在の法隆寺西院伽藍は、それ以後に再建されたものとする。「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」（天平十九年〔748〕）に五重塔初層の塑造窟と塑像群、及び中門の塑像の金剛力士像が和銅四年（713）頃完成したとあるから、この頃、一応の再建は成ったと推測される。同資財帳には経蔵や鐘楼も記載されており、神亀年間建立とされる経蔵や、現鐘楼の前身や、講堂など、奈良時代に造営が続けられていたものと思われる。

一方、焼失した法隆寺は、現西院伽藍の東南方、旧南築地の南側外、現普門院南方に塔の心礎が現存するいわゆる若草伽藍がそれにあたることされる。若草伽藍については塔跡と金堂跡が発掘され、次の点が判明した。まず焼土があること、塔の前に金堂を後に南北線上に並べる四天王寺式伽藍配置であること。その南北軸が磁北に對

して二十度西偏していて、現西院伽藍の南北軸の四度西偏と異なること。若草伽藍跡の出土瓦は素弁八葉文あるいは九葉文軒丸瓦と、杏葉形（古式バルメット）唐草文あるいは均正忍冬唐草文軒平瓦であるが、西院伽藍のものは、復弁八葉蓮華文軒丸瓦と均正忍冬唐草文軒平瓦で、後者は若草伽藍のものに比べて暢びやかになっている。つまり現西院伽藍は、旧寺地を避けて、すぐ後の丘陵地の斜面に移動し、そこを削平して、南北軸の方向を変え、伽藍配置を変えて再建されたものである。その建物についていえば、様式と技法からみて金堂が最も古く、次いで五重塔、次いで中門・廻廊（東室も同じ頃か）という順序で再建されたらしい。再建された時期は、大官大寺や川原寺や薬師寺が唐の新様式を採用しつつ造営された時期と重なっているが、法隆寺では高麗尺を基本として、漢代・楽浪時代や南北朝の古い技法・様式と、隋・初唐の比較的新しい技法・様式を混ぜながら独自の建築を完成したと考えられる。このような事情は金堂一つをとってみても、仏像やその台座と天蓋、壁画などの相互

関係にもあらわれている。

皇極二年(643)に蘇我入鹿によって滅ぼされた聖徳太子一族(上宮王家)なき後、一体誰が何の為に、長期に亘って法隆寺を再建してきたのであるか。それも単に法隆寺だけでなく、法起寺・法輪寺そしておそらく中宮寺も造営が続けられているのである。

これらの事情については多くの諸説があるが、とりあえず「日本書紀」の関連事項を列記し、次いで簡単な解説を試みたい。

## 丁

欽明十三年(552)十月、百済の聖明王が釈迦金銅像一軀を送ってきた。(幡蓋若干、経論若干巻も)蘇我稻目はこれを小懇田の家に安置し、向原を家を寺とした。(疫病が流行したため、物部尾與と中臣鎌子が蘇我氏の崇仏に反対し、仏像を難波の堀江に捨てた。)(1) 欽明十四年(553)、池辺直水田、河内国泉郡茅渟の海で樟木を捨得し、画工に命じて仏像二軀を造らせた。(吉野比蘇寺に安置) 欽明十五年(554)、百済、日本に派遣している僧曇慧ら九名を、道深ら七名と交替させる。(五経博士・易博士・曆博士・医博士・採薬師・薬人のメンバーも入れ換える。) 同年十二月、聖明王、新羅のために殺される。同十六年(555)、聖明王の第二子恵(余昌の弟)来日。(十七年春、帰国。) 同十八年(556)、余昌即位して威徳王となる。同三一年(570)、蘇我稻目、薨す。同三二年(571)、欽明天皇、崩す。新羅討伐と任那再建を遺言す。檜隈坂合陵に葬る。敏達四年(575)、

## 二

息長真手王の女広姫を皇后とす。(押坂彦人大兄皇子の母) 敏達五年(576)、豊御食炊屋姫(後の推古天皇。母は蘇我稻目の女で馬子の姉妹の堅塩姫)を皇后とす。同六年(577)、大別王を百済に派遣す。十一月、百済王、経論若干巻、律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工の六人を大別王に托して日本に送る。これらを大別王の難波の寺に居らしめる。敏達八年(578)十月、新羅から仏像を贈られる。敏達十三年(583)、百済から鹿深臣が弥勒の石像一軀を、佐伯連が仏像一軀を持ち帰る。蘇我馬子この二軀の仏像をもらい受け、鞍部村主司馬達等と池辺直水田に仏教修行者を捜させる。播磨国に住む還俗僧の高麗の恵便を召し出して仏教の師とす。司馬達等の娘嶋(十一歳)を出家させて善信尼とし、漢人夜菩の娘豊女(禪藏尼)と錦織壺の娘石女(恵善尼)をその弟子とする。仏殿を宅の東方に造り、弥勒の石像を安置す。司馬達等、仏舍利を齋食の上に発見し、蘇我馬子に献上する。仏舍利を鉄質の中に置いて鉄鎚で打ったが摧けず、却って質と鎚とが摧けた。又、水中に入れると意のままに浮沈した。馬子、石川宅に仏殿を造る。仏法の初はここにおこったという。敏達十四年(584)二月、蘇我馬子、大野丘の北に塔を造り、司馬達等の献じた仏舍利を柱頭に安置した。三月、疫病流行を理由に、物部守屋と中臣勝海は崇仏に反対し、塔を斫り倒し、仏殿と仏像を焼き、残った仏像を難波の堀江に捨てた。善信尼らを捕えて海石榴市の亭に監禁した。六月、天然痘が流行したため、天皇は三尼を釈放させ、馬子はあらたに精舎を作って三尼を迎

えた。八月、敏達天皇崩じ、九月用明天皇（母は堅塩媛）即位し磐余に宮を造る。敏達、任那復興を遺言す。用明元年（888）正月、穴穂部間人皇女（母は堅塩媛の妹、小姉君。用明の異母妹）を皇后とす。その長男が聖徳太子（厩戸皇子。はじめ上宮に住し、のち斑鳩に移る。）五月、穴穂部皇子（穴穂部間人皇女の同母弟）皇位をねらう。同二年（887）、用明天皇、病氣となり仏教に頼って平癒せんとす。鞍部多須奈（司馬達等の子）、天皇のために出家修道し、丈六の仏像と寺を造ることを誓願す。（南淵の坂田寺の丈六の木造の仏像と挾侍菩薩）四月九日、天皇崩す。七月二日、磐余の池上陵に葬る。五月、物部守屋、穴穂部皇子を天皇位に即けようとする。蘇我馬子、炊屋姫尊を奉じて穴穂部皇子を殺す。善信尼らに戒律を学ばせるために百済に派遣しようとする。七月、蘇我馬子、物部守屋を討伐す。馬子と聖徳太子、戦勝を祈願して、飛鳥寺と四天王寺を造ることを誓願する。八月、炊屋姫尊、崇峻天皇（穴穂部間人皇後の同母弟）を立つ。倉梯宮に居す。崇峻元年（888）、百済、戦勝祝賀の使節を派遣してきて、仏舍利・僧・寺工・鐘盤博士・瓦博士・画工を献上す。蘇我馬子、飛鳥衣縫造の祖樹葉の家を壊して法興寺を造る。場所は飛鳥真神原とも飛鳥苦田ともいう。(2) 善信尼ら、百済の使節とともに学問のために渡航す。同三年（890）、学問尼善信等、帰朝して桜井寺（豊浦寺）に居す。鞍部多須奈（善信尼の兄弟）出家す。出家して尼になる者多し。同五年（892）十月、法興寺（飛鳥寺）の仏堂（中金堂）と歩廊（回廊）完成す。十一月、

蘇我馬子、東漢直駒に崇峻天皇（馬子の甥）を殺させる。即日、倉梯岡陵に葬る。馬子、東漢直駒を殺す。十二月、推古天皇即位。（豊浦宮）推古元年（893）正月十五日、仏舍利を法興寺の刹柱の礎の中に安置し、翌十六日、刹柱を立てる。（飛鳥寺五重塔着工）四月十日、厩戸皇子を皇太子とす。九月、用明天皇を河内磯長陵に改葬す。この年、四天王寺を難波の荒陵に造る。同二年（894）、天皇、詔して三宝を興隆せしめんとす。諸臣連ら、おのおの君親の恩のために、競って仏舎を造る。これを寺という。同三年（895）、高麗僧慧慈帰化し、聖徳太子これを師とす。百済僧慧聡来朝し、この二人が三宝の棟梁となる。同四年（896）、法興寺（飛鳥寺）完成す。蘇我馬子の子の善徳臣を寺司とする。慧慈・慧聡、法興寺に住す。同八年（900）、新羅、任那を侵攻す。天皇、任那を救援せんとす。同九年（901）二月、聖徳太子、斑鳩に宮室を造る。同十年（902）、来目皇子（用明天皇の子、聖徳太子の同母弟）を將軍とし、二万五千の兵をもって新羅を討伐せんとす。十月、百済僧観勒来朝して、曆法・天文地理・遁甲方術を伝える。同十一年（903）二月四日、来目皇子、筑紫において病歿す。四月一日、異母兄弟の当麻皇子を將軍とす。当麻皇子、難波から進発するも、妻の死により帰還す。十月、天皇、小墾田宮に遷る。十一月、秦河勝、聖徳太子から仏像を賜わって、蜂岡寺（広隆寺）を造る。十二月、冠位十二階を定む。同十二年（904）四月三日、聖徳太子、憲法十七条を作る。九月、朝礼を改める。黄書画師・山背画師を定む。同十三年（905）四月一日、

推古天皇、丈六の銅・繡二仏像を發願す。鞍部鳥を造仏工とする。

同十四年(595)四月八日、銅・繡二仏完成す。丈六の銅仏を法興寺の金堂に安置する。この年から寺毎に四月八日と七月十五日に設齋すること始む。五月十五日、推古天皇、鞍部鳥に勅してその功績をたたえ、冠位十二階の第三位の大仁の位を賜わり、近江国の水田二十町を賜わった。この水田の収益で、天皇の為に金剛寺(南淵の坂田尼寺)を造った。(鞍部鳥の功績は、天皇が仏法を興隆しようとして仏刹を建てようとしたとき、そこに納めるべき仏舍利を祖父の司馬達等が献上したこと、わが国に未だ僧尼がいなかった時に、用明天皇の病氣平癒を祈って父の多須奈が出家し、おぼの嶋女も出家して尼僧たちの指導者になったこと、天皇が丈六仏を造ろうとしてよい仏の姿を求めたとき、鳥の奉った仏の図は天皇の心にぴたり合うものであったこと、仏像が完成して金堂に入れようとしたが巧く入らず、工人達は戸を壊して入れようとした時、鳥は工夫して戸を壊さずに入れたことである。)七月、聖徳太子、天皇の為に勝鬘経を講説する。この年、太子、岡本宮で法華経を講説する。推古天皇、播磨国の水田百町を聖徳太子に賜う。太子、これを斑鳩寺に施入す。(3) 同十五年(597)、天皇、小野妹子を隋に遣わす。同十六年(598)四月、小野妹子、隋より帰る。同時に、隋使の裴世清(鴻廬寺掌客)、高麗経由で来朝す。六月十五日、難波津に至り、新館に滞在せしめる。八月三日、飛鳥小墾田宮に至る。九月五日、難波の大郡にて饗応す。九月十日、帰国の途につく。この時、小野

妹子、再び大使として同行し、留学生として高向玄理、南淵請安、僧旻ら八人も同行す。同十七年(599)九月、小野妹子ら帰国す。同十八年(600)三月、高句麗の僧曇徴、来朝し五経・彩色・紙墨・碾磑を伝える。同二十年(602)正月七日、天皇、蘇我氏の有能さを称える。二月二十日、皇太夫人堅塩媛を檜隈大陵に改葬す。百濟人芝耆摩呂来朝、須弥山の形と具橋を南庭に造る。百濟人味摩之婦化し、伎楽を伝う。二十一年(603)十一月、難波より京に至るまでに大道を置く。同二十六年(608)八月一日、高句麗の使節、隋の煬帝と戦って勝利したことを伝える。同二十八年(610)十月、檜隈陵の上に砂磑を葺き、域外に土を積んで山を造り、氏毎に大柱を土の山の上に立てしむ。この年、聖徳太子と馬子、天皇記・国記・臣連伴造国造百八十部・公民等の本記を記録す。同二十九年(611)二月五日、聖徳太子、斑鳩宮に薨す。この月、磯長陵に葬る。同三十一年(613)七月、新羅、仏像一具・金塔及び舍利・灌頂幡一具・小幡十二条を献上す。仏像は秦寺(広隆寺)に安置し、他のものは四天王寺に施入す。隋への学問僧惠蕭・惠光、医シヤクの恵日、福因ら新羅の使節に従って帰国し、留学中の者は充分業績を上げてゐるから召喚すべきであり、大唐国は法式の整備した豊かな国であるから常時交流すべきであるといっている。同三十二年(624)四月十七日、百濟僧觀勒を僧正、鞍部徳積を僧都、阿曇連を法頭として僧尼を檢校せしむ。九月三日、寺と僧尼を校閲して、造寺の因縁・入道の因縁・出家した年月日を記録す。この時、寺は四十六、

僧は八百十六人、尼は五百六十九人、併せて一千三百八十五人とあり。同三十四年(330)五月二十日、蘇我馬子薨す。(4) 桃原の墓に葬る。同三十六年(332)三月七日、推古天皇崩す。田村皇子(彦人大兄王の子)に位を譲り、山背大兄王には若いので待てという。九月二十四日に竹田皇子(敏達皇子、推古所生)の陵(大野岡上にあり)に葬る。

三十一代用明、三十二代崇峻、三十三代推古天皇の三代は、蘇我王朝と呼んでもよい支配体制で、蘇我氏が東漢(倭漢)氏を中心とする渡来系氏族の知識・技術・勢力を利用して支配権を確立した。その要となるのが仏教文化で、渡来系の人々の心を繋ぎとめる鍵となった。蘇我王朝の申し子ともいべき聖徳太子は、朝鮮半島を主とする大陸政策を積極的に推進しようとして、斑鳩に宮室を移し、近江・山城のルートを固めるべく秦氏を起用したが、武力による解決は成功せず、隋との直接交渉で局面を開すべく、まず隋と対等に交渉しうる国家制度・組織の整備を行い、国家としての体裁を整えた。上宮王家滅亡の後も、歴代政府・天皇によって太子の基本的な姿勢は受けつがれ、特に仏教を中国交渉の窓口にするやり方は、鎌倉・室町時代の武家政権と五山禅林の關係にまで保持されている。日本国家の基本政策立案者としての聖徳太子への尊崇と、蘇我王朝を支えた渡来系知識人の実力とが、法隆寺を再興させた原動力であろうと思う。

推古三十六年(338)、境部臣摩理勢、山背大兄王(聖徳太子の長

子、母は蘇我馬子の女刀自古郎女)を天皇に立てんとして蘇我大臣蝦夷と対立し殺さる。舒明二年(330)、宝皇女(後の皇極天皇)を皇后とし、(その子は葛城皇子Ⅱ天智天皇、間人皇女Ⅱ孝徳天皇の皇后、大海皇子Ⅱ天武天皇)蘇我馬子の女法提郎媛を夫人とす。

(その子は古人大兄皇子)十月、飛鳥岡の傍の岡本宮に移る。同八年(336)六月、岡本宮焼失し、田中宮に移る。同十一年(339)七月、天皇、大宮と大寺を造らんとし、百済川の側を宮処とし、西の民は宮を造り、東の民は寺を造る。書直県を大匠(造宮長官)とす。二月、百済川のほとりに九重塔を建つ。同十三年(341)十月、天皇、百済宮に崩す。皇極元年(342)正月十五日、皇后即位し、蘇我蝦夷を大臣とす。その子入鹿、権勢を振う。九月三日、天皇、大寺を造るために近江と越の丁を徵用し、宮室を造るために国々の木材を採取し、東は遠江、西は安芸の間の丁を徵用す。十二月、舒明天皇を滑岡谷に葬り、天皇は小墾田宮に移る。同二年(343)九月六日、舒明天皇を押坂陵に改葬す。十月十二日、蘇我入鹿、古人大兄皇子を天皇にせんと計る。十一月一日、入鹿、巨勢徳太(古)と土師婆娑連に山背大兄王らを斑鳩宮に襲撃せしむ。斑鳩宮は焼失し、山背大兄王らは斑鳩寺で自殺す。蘇我蝦夷、入鹿の暴挙に憤る。同四年(345)六月十二日、中大兄皇子、中臣鎌子・蘇我倉山田石川麻呂と謀って、大極殿において蘇我入鹿(鞍作と称す)を誅殺し、十三日、蝦夷を殺す。蝦夷ら天皇記・国記・珍宝を焼く。十四日、皇極天皇、位を弟の輕皇子(孝徳天皇)に譲る。中大兄皇子を皇太子とし、阿

倍内麻呂(倉梯麻呂)を左大臣、蘇我倉山田石川麻呂(入鹿の從兄弟)を右大臣、中臣鎌子を内臣とす。皇極四年を改めて大化元年とす。八月八日、天皇、大寺(飛鳥寺か)に僧尼を集めて、欽明天皇朝の蘇我稻目、敏達朝から推古朝へかけての蘇我馬子の仏教興隆に対する功績を述べ、自分もこの方針を継続することを宣言し、狛大法師・福亮・惠雲・常安・靈安・惠至・僧旻(飛鳥寺の寺主か)・道登・惠隣・惠妙を十師(推古朝の僧正・僧都にかわるもの)。仏教界の高僧による自治統制機関で、中国北齊の制度に倣ったものか)とし、惠妙を百濟寺の寺主とした。天皇から伴造にいたるもの造寺に対しては朝廷が援助する旨をのべ、寺主と寺司を呼んで諸寺の僧尼・奴婢・田畝の実情を報告するように命じた。来目臣(久米臣)・三輪色夫君・額田部連甥を法頭(朝廷の官職。僧尼・奴婢・田畝を検証する役か)に任じた。九月、古人大兄皇子、謀反し、大中兄皇子これを誅殺す。十二月九日、天皇、都を難波長柄豊碕に移す。大化二年(646)正月一日、改新の詔勅を下す。同四年(648)二月五日、左大臣阿倍内麻呂、四衆(比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷)を四天王寺に集めて、仏像四軀を塔(五重塔)内に安置し、靈鷲山のかたちを鼓をかさねて造る。同五年(649)三月十七日、阿倍内麻呂薨す。三月二十四日、蘇我日向(石川麻呂の異母弟か)、右大臣蘇我倉山田石川麻呂が中大兄皇子を害せんとすと密告す。天皇、討伐の軍を發し、石川麻呂、逃れて山田寺に入り自殺す。同月、蘇我日向を筑紫大宰帥に任ず。四月二十日、巨勢徳陀古臣を左大臣

に、大伴長徳連を右大臣とす。白雉元年(650)十月、難波京を造るために丘墓を破壊された人々に対して補償を行う。難波京の將作大匠(造宮長官)荒井田直比羅夫、京の界標を立つ。百濟寺のために丈六の繡仏・俠侍・八部等三十六像を造る。(天平十九年(747)の「大安寺資財帳」に記載す。)この年、漢山口直大口、天皇の命により千仏の像を彫刻す。(5) 同二年(651)三月十一日、百濟寺の丈六の繡仏完成す。十五日、皇極上皇、十師らを召して設齋す。十二月晦日、味経宮(難波長柄宮に近い海岸の地)に二千一百余の僧尼を集めて一切経を読ましむ。この夕に、二千七百余の灯を朝廷の庭内で燃して、安宅・土側などの経(地鎮の為の經典か)を読ましむ。孝徳天皇、新宮に移住し、難波長柄豊碕宮と名づく。同三年(652)四月十五日、沙門惠隱を内裏に召して無量寿経を講読せしむ。九月、難波宮完成す。十二月、天下の僧尼を内裏に召して、設齋・喜捨・燃灯す。同四年(653)五月、遣唐使(第二次)発向す。六月、旻法師寂す。天皇・皇極上皇・中大兄皇子ら弔問す。旻法師のために、画工狛堅部小麻呂、鯽魚戸直らに命じて仏・菩薩の像を造り、川原寺(或は山田寺ともいう)に安置す。この年、中大兄皇子、倭の京に移らんとするも、天皇これを許さず。中大兄皇子、皇極上皇・間人皇后らとともに、飛鳥河辺行宮に移る。同五年(654)二月、遣唐使(第三次)発向す。十月十日、孝徳天皇、難波宮に崩す。天皇を大坂磯長陵に葬る。斉明元年(655)、皇極上皇、飛鳥板蓋宮に即位して斉明天皇となる。冬に板蓋宮炎上し、川原宮に移る。

同二年(656)、後飛鳥岡本宮に移る。同六年(660)、天皇、難波宮に行幸し、軍備を整えて百済を救援し、新羅を討伐せんとす。同七年(661)五月九日、天皇、筑紫にいたり、朝倉橘広庭宮に居す。七月二十四日、天皇、朝倉宮に崩す。十一月七日、飛鳥の河原に殯す。天智二年(663)三月、前軍上毛野君稚子・間人連大蓋、中軍巨勢神前臣詔語・三輪君根麻呂、後軍阿倍引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄の指揮下に、二万七千の軍勢をもって百済を救援し、新羅を討たんとす。八月二十七日、日本軍、唐の水軍と白村江に戦い敗る。百済滅亡す。同四年(665)二月二十五日、間人大后(天智妹、孝徳皇后)薨す。三月一日、間人大后のために三百三十人を出家せしむ。同六年(667)、齐明天皇と間人皇后とを小市岡上陵に合葬す。太田皇女(天智皇女、皇弟大海皇子妃、大津皇子母)を陵の前の墓に葬す。三月十九日、都を近江に遷す。同七年(668)正月三日、中大兄皇子、正式に天皇位に即く。古人大兄皇子の女倭姫王を皇后とし、蘇我倉山田石川麻呂女の遠智姫を夫人とし(太田皇女、鷗野皇女、天武皇后・持統天皇、建皇子を生む)、遠智姫の妹姪姫を夫人とし(御名部皇女、高市皇子妃?、阿倍皇女、草壁皇子妃・元明天皇・文武天皇母を生む)、阿倍倉梯麻呂の女橘姫を夫人とし、蘇我赤兄(馬子の孫)の女常陸姫を夫人とす(山辺皇女、大津皇子妃を生む)。天智にはほかに川嶋皇女、施基皇子(光仁天皇父)、大友皇子(壬申の乱で敗死。明治になって弘文天皇と諡す。)あり。十月、高句麗滅亡す。同八年(669)十月十六日、藤原内大臣(鎌足)薨す。

この冬、斑鳩寺に災けり。同九年(670)四月三十日、夜半の後に法隆寺に災けり。一屋も余ること無し。大雨ふり、雷震る。(6)同十年(671)九月、天皇病む。十月八日、内裏において百仏の開眼を行う。この月に、天皇、袈裟・金鉢・象牙・沈水香・栴檀香と諸の珍財を法興寺(飛鳥寺)の仏像に奉獻す。十月十七日、東宮(大海皇子)内裏の仏殿において出家し、十九日、吉野に入りて仏道修行す。(蘇我臣安麻呂、蘇我倉山田石川麻呂の弟の子が、大海皇子に皇子殺害の隠謀のあることを告げたため出家したという。)十二月三日、天智天皇、近江宮に崩す。天武元年(672)七月二十三日、大友皇子自殺し、近江朝滅亡す。(壬申の乱。書紀は壬申の年を大友天皇紀として立てず。)九月、天皇、倭の京にいたり嶋宮(馬子の邸宅跡)に入り、岡本宮(舒明・齐明の皇居)に移り、新たに宮室を岡本宮の南につくり、飛鳥浄御原宮といい、この冬に移る。同二年(673)三月、書生(写経生)をあつめて、始めて一切経を川原寺において写せしむ。十二月十七日、小紫美濃王・小錦下紀臣訶多麻呂を高市大寺(大官大寺)を造る司とす。(造高市大寺司)知事(寺を管理する僧職)に福林僧、小僧都に義成、佐官(僧正・僧都)の下の僧官。僧綱の録事に二人の僧を任じ、佐官は四人となる。同四年(675)四月五日、僧尼二千四百余を召集して宮中に設齋す。十月三日、使を四方に遣して、一切経を求めしむ。同五年(676)、この夏、旱魃。諸の神祇に祈らしむ。諸の僧尼を召請して三宝に祈らしむ。十一月十九日、京に近い国々において放生を行う。十一月

二十日、使を四方に遣わして、国々に金光明経・仁王経を説かしむ。同六年(677)六月、東漢直りに、その氏を絶やさぬことを詔す。(七つの悪事を行い、推古天皇の時から天智天皇の時まで、常々謀略に使われてきたが、その事は不問に付して)八月十五日、飛鳥寺において大規模に設齋し、一切経を読ましむ。天皇、南門に出御して礼拝し、親王・諸王・群卿の各人に出家者一人づつを賜う。同八年(680)四月五日、詔して、食封のある寺の由来を考慮して、加うべきは加え、除くべきは除かしむ。又、諸寺の名(漢風の寺名)を定む。十月、詔して、僧尼は常に寺の内において三宝を護るべきであるが、老いあるいは病む僧尼は、親族あるいは信者に舎屋を造らしめそこに居らしむ。同九年(680)四月、詔して、今後、国の大寺である二・三の寺を除いて、そのほかの諸寺は官司が運営することを無からしむ。ただし、食封のある寺は三十年間はその所有を認め、三十年経ったら中止せよ。飛鳥寺は官司する寺ではないが、今まで官司が治めてきたし、又、いろいろ功績もあったので、官司が治むことにすべし。五月一日、詔して、京内の二十四の寺に、緋・綿・糸・布を適宜布施せしむ。又、宮中及び諸寺において金光明経を講説せしむ。十月、京内諸寺の貧しい僧尼と百姓に布施せしむ。(僧尼一人には緋四匹・綿四屯・布六端、沙弥具足戒を受けていないものと白衣俗人には緋二匹・綿二屯・布四端)十一月十四日、皇后不子(病氣)。平癒を祈って薬師寺を發願し、百人出家せしむ。これによって平癒す。同十年(681)二月二十五日、詔して律令(淨御原令)を定めしむ。草壁皇子(母は菟野皇女)持統天皇)を皇太子とす。同十一年(682)八月二十八日、日高皇女(草壁皇子の女。母は阿倍皇女。後の元正天皇)の病氣平癒を祈って、百四十余人を大官大寺において出家せしむ。同十二年(683)三月二日、僧正・僧都・律師を任命し、僧尼令に従って僧尼を統制せしむ。同十四年(685)三月二十七日、詔して、諸国の家ごとに仏舎をつくり、仏像と經典において礼拝供養せしむ。八月十二日、天皇、淨土寺(山田寺)に行幸す。十三日、川原寺に行幸す。九月二十四日、天皇の病氣平癒を祈って、三日間、大官大寺・川原寺・飛鳥寺で経を誦ましむ。十月十七日、宮中において金剛般若経を講説せしむ。朱鳥元年(686)五月十四日、大官大寺に食封七百戸を与え、稻三十万束を入れる。二十四日、天皇の病氣のために、川原寺で薬師経を説かしむ。六月十六日、伊勢王及び官人らを飛鳥寺に遣わして、僧正・僧都及び衆僧に天皇の病氣平癒を祈らしむ。又、三綱律師と四寺(大官大寺・飛鳥寺・川原寺・豊浦寺の四寺か)の和上・知事及び師位僧らに御衣・御被各一具を施す。十九日、官人を川原寺に遣して燃灯供養す。七月八日、百僧を宮中に召して金光明経を読ましむ。この月、諸王臣ら、天皇のために観世音像を造り、観世音経を大官大寺に説かしむ。八月二日、百体の観世音像を宮中に坐えて、観世音経二百巻を読ましむ。二十一日、檜隈寺・輕寺・大窪寺に食封百戸を寄す。三十年を限る。二十三日、巨勢寺に食封二百戸を寄す。九月四日、親王より諸臣にいたるまで、皆川原寺に集



いて天皇のために誓願す。九月九日、天武天皇、淨御原宮の正宮に崩す。十月三日、大津皇子とその妃山辺皇女(天智皇女)死す。十月十九日、天武天皇の為に無遮大会を大官大寺・飛鳥寺・川原寺・小懇田豊浦寺・坂田寺で行う。持統元年(682)九月九日、国忌の齋会を京の諸寺で行う。同二年(683)正月八日、無遮大会を薬師寺に設く。同三年(684)四月十三日、皇太子草壁皇子薨す。同四年(685)七月十四日、七寺の安居の沙門三千三百六十三人に、緇・糸・綿・布を施す。別に皇太子の為に、三寺の安居の沙門三百二十九人に布施す。十月二十九日、高市皇子、公卿百寮とともに藤原の宮地を觀る。十二月十九日、天皇、公卿百寮とともに藤原の宮地を觀る。同六年(686)閏五月三日、大水あり。京師及び四畿内(大和・山城・摂津・河内)をして金光明経を講説せしむ。同八年(688)五月十一日、金光明経百部を諸国に送り置き、年毎に正月の上玄(八日、十四日)に読ましむ。十二月六日、藤原官に移る。同十一年(689)六月二十六日、公卿百寮、天皇の病のために、仏像を造ることを誓願す。七月二十九日、公卿百寮、仏の開眼会を薬師寺で行う。

以上は法隆寺の罹災前後から再建期の状況である。まず皇極及び天智・天武朝が、蘇我氏を中心とする仏教興隆政策を引きついでいること、東漢氏を中心とする渡来系氏族の力が依然として強力であること、飛鳥寺は蘇我本宗家なき後も官司によって運営され、その仏教政策上の地位は動かしがたく、僧尼統制の機関である僧綱もこ

こに置かれていたこと。天皇家主導の寺院の建立がはじまったこと、すなわち百濟寺(のちの高市大寺・大官大寺)・川原寺・薬師寺で、百濟寺は舒明十一年(680)から白雉元年(690)、川原寺は白雉四年(693)から天武二年(673)、高市大寺(大官大寺)は天武二年(673)から天武十一年(682)、薬師寺は天武九年(680)から持統二年(688)ころに造営されたこと、その造営には造高市大寺司のような公的な組織が作られたこと、經典については一切経・金光明経・仁王経・無量寿経・薬師経。観音経が読誦・講説されたことがわかり、持統朝には飛鳥四大寺として飛鳥寺・川原寺・大官大寺・薬師寺が揃うのである。

## (二)

(1) 「上宮聖徳法王帝説」では仏教伝来は欽明戊午年であり「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」では欽明七年戊午年で五三八年に当る。「日本書紀」では欽明朝に戊午の年はなく三十二年間であるが、「帝説」では四十一年間となる。そうするとその元年は辛亥年で継体崩御の年と同一年になる。ここで周知の如く継体↓欽明と、継体↓安閑↓宣化↓欽明の二流があり、欽明を擁立する蘇我氏と継体を擁立した大伴氏との確執があるのでないかと言われている。

(2) 飛鳥寺の造営経過については、これも周知のように、「日本書紀」と「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」(747)とは相違する。まず崇峻元年(588)に百濟から蘇我氏の勝利を祝って献上された寺

院造営に必要な人及び物について、「日本書紀」は仏舎利・僧六人（聆照律師・令威・惠衆・惠宿・道嚴・令開）・寺工二人（太良未太・文賈古子）・鑪盤博士一人（將得白味淳）・瓦博士四人（麻奈文奴・陽貴文・懷貴文・昔麻帝弥）・画工一人（白加）であるが「元興寺縁起」はまず我国から百済の聖明王に法師と諸仏（仏像）を請求したことを述べ、僧二人（上釈令照律師・惠聡法師）・鑪盤師一人（將得白味淳）・寺師二人（丈羅未太・文賈古子）・瓦師四人（麻那文奴・陽貴文・布陵貴・昔麻帝弥）をあげ、作り奉らしむる者、すなわち飛鳥寺の造営の総監督とも考えられる人物を二人、山東漢大費直名麻高垢鬼と同じく名は意等加斯直とをあげ、更に書人二人（百加博士・陽古博士）をあげる。（この項は引用の「塔露盤銘」より）両者の相違で注目すべきは、「日本書紀」は塔に安置すべき仏舎利の伝来はいうが、金堂にまつる仏像をいわない点である。「日本書紀」はついで、崇峻三年（590）に材木を調達したこと、崇峻五年（592）の冬に仏堂（金堂）と歩廊（回廊）が完成したこと、推古元年（593）に仏舎利を刹（心柱）の礎石の中に納めて塔に着工したこと、推古四年（596）に法興寺（飛鳥寺）が完成したことをいふ。「元興寺縁起」も同年十一月の完工をいうが、次いで、「爾時使作金人等、意奴弥首名辰星、阿沙都麻首名未沙乃、鞍部首名加羅爾、山西首名都鬼、以四部首為將、諸手使作奉也」とあり、金人を金銅仏とすれば、意奴弥氏と阿沙都麻氏と鞍部氏と山西（漢）氏の頭領が協力して、それぞれ輩下の職人を使って仏像（金堂の本尊）を

作ったことになる。ただしこの項も「塔露盤銘」からの引用ということであるが、仏像制作にも言及するかの疑問もある。飛鳥寺は塔（五重塔）を中心に北と東西に三つの金堂をもつ特異な伽藍配置をとるが、推古四年（596）に完成したのは、塔と塔の北の中金堂と廻廊であろう。しかし東西の金堂も最初から設計されており、塔の中心から各金堂の中心までの距離は九十尺であり、塔の中心から三方の廻廊までの距離も一七〇尺である。ただ、最初に建立された塔と中金堂の基壇は壇上積（地覆石・東石・羽目石・葛石から成る）であるが、東西の金堂の基壇は二重で玉石あるいは板石などを積んでいる。ところで現在の安居院の飛鳥大仏は中金堂の本尊であると推定され、花崗岩切石による基壇の上に凝灰岩の台石を置いた上に坐す金銅仏である。これについては「日本書紀」は何もいわぬが、「元興寺縁起」によれば四氏族の技術者が共同で作った可能性もある。さて、残る東西金堂の本尊については、「日本書紀」も「元興寺縁起」も推古十三年（605）の着工を伝えている。「日本書紀」は推古天皇が蘇我馬子と聖徳太子とに命じて丈六の銅繡二仏を作らせたとあり、着工は四月一日、仏工は鞍作鳥で、高麗の大興王が黄金三百兩を賛助したという。「元興寺縁起」は発願者についてはいわず、尺迦丈六像銅繡二軀ならびに挾侍をつくるという、着工は四月八日で、銅二万三千斤と金七百五十九兩を費し、高麗大興王が黄金三百二十兩を助成して同心結縁したという。（所引の「丈六光銘」）「日本書紀」は推古十四年（606）四月八日に銅繡二仏が完成

して元興寺の金堂に安置したといい、鞍作鳥は大仁の位と近江国坂田郡の水田廿町を賜わった。「元興寺縁起」は推古十六年(608)に、大隋国使主鴻臚寺掌客裴世清と使副尚書祠部主事遍光高が高麗大興王の黄金三百二十兩を預って来朝し、翌年推古十七年(609)四月八日に完成して、元興寺に安置したという。「書紀」も鴻臚寺掌客裴世清と下客十二人の来朝を記し、その接待の状況を詳述している。「書紀」はここに至るまで、仏教興隆に果した鞍部氏三代の事蹟を強調し、ここで又、それを総括しているから、鞍部氏の氏寺である坂田寺の縁起によって物語の筋道を構成しているのではないかとも言われている。因みに、鞍部氏の本業馬具と仏像及びその荘嚴具との関係については藤ノ木古墳の出土品が朝鮮・中国における出土品との関係も含めて、新しい展望を開く可能性もある。現存の飛鳥大仏については破損が著しいので資料としての信頼性は必ずしも高くないが、推古十四年もしくは十七年に完成した鞍作鳥の作である可能性が無くもない。鳥(止利)の作品は周知のように法隆寺金堂釈迦三尊像であるが、これを代表とする法隆寺の止利様式の作品と飛鳥大仏とを比較検討した論考がある。久野健氏の「飛鳥大仏」(『美術研究』三〇一号、昭和五十年九月)で、それによると、両者は着衣の方法と体軀の表現に違いがあるという。飛鳥大仏は大衣を左肩と左腕にかけて背後にまわし、右肩と右腕を覆い、さらに胸を覆って、残りの衣端を左肩と左腕にかける。これは南朝梁の仏像にみられる。法隆寺の止利系の仏像では、上記の大衣の端は、正

面からみると左前膊にかかっているように見えるが、側面・背面から見ると左肩から左前膊にかかっており、二種の服制を折衷したようであるが、結局は合理的な着衣法に対する無理解あるいは無関心からくるもので、立像の場合も着衣に不合理な表現がみられるという。また飛鳥大仏は左足を右膝の上において結跏趺坐し、左足の裏の一部を衣から出しているが、止利系のは、逆に右足を左膝の上におき、右足の裏をあらわす。その他、飛鳥大仏は指の肉づきがよく太いが、釈迦三尊の指は全体にはっそりしているとか、前者の関節部は深かったがねを入れて一線で表わすが、後者は二本の弧線であらわすとか、前者の耳朵は貫通しているが、後者の耳朵には穴がないといった違いがあり、前者の衣文は比較的写実的であるに対して、後者の衣文は抽象化されているという。

(3) 斑鳩寺すなわち法隆寺の初出は「書紀」の推古十四年(606)であるが、おそらく推古九年(601)の斑鳩宮着工と平行したものである。舒明朝における百濟宮と百濟大寺がそうであるし、天武朝の淨御原宮と高市大寺、飛鳥寺と蘇我氏の邸宅などの関係も想定される。斑鳩宮は東西に尼寺と僧寺、すなわち中宮寺と斑鳩寺を備えていたともいえ、それは飛鳥寺と豊浦尼寺の関係と同じであろう。仏像すなわち本尊として可能なもので最も古いのは、金堂の東の間にある薬師如来坐像である。像容からは薬師如来と判別できるものはなく、施無畏・与願の両手をもつ一般的な形であるが、その光背銘に「池辺の大宮に天下治しめす天皇、大御身勞き賜いし時、歳

は丙午に次る年(用明元年(586)、「書紀」は天皇の病を翌年(587)とする。)、大王天皇(推古)と太子(聖徳)とを召して誓願し賜う。我が大御病太平ならんと欲し坐す故に、將に寺を造り、薬師像を作り仕え奉らんとすと詔す。然るに当時、崩じ賜いて造り堪えざれば、小治田大宮に天下治しめす大王天皇(推古)及び東宮聖王(聖徳太子)、大命を受け賜わりて、歳は丁卯に次る年(推古十五年(597))、仕え奉る。」とある。中尊釈迦三尊像と同じく二重宣字座にのるが、その様式及び技法上、釈迦像に先行する可能性はなく、後に、あるいは天智九年の罹災後に作られた模古作であるとの説が優勢である。ただし「上宮聖徳法王帝説」に収める天寿国繡帳の銘文と同じく大王と天皇の両用がみられ、聖徳太子による天皇号確立の資料となるものであろう。若しこの薬師像が本尊であるならば、斑鳩寺は太子の父の追善の寺として発足したことになる。

釈迦三尊の光背銘も周知のものであるが、「法興元卅一年歳次辛巳(推古二十九年(591))十二月、鬼前太后(穴穂部間人皇后か)崩す。明年正月廿二日、上宮法皇枕病愈弗らず。干食王后(膳部善岐岐美郎女か)仍って劳疾を以て並びに床に著く。時に王后(刀自古郎女か、位奈部橋王(橋大郎女)か、あるいは両者か)王子等及び諸臣と、深く愁毒を懷き、共に相い発願す。仰いで三宝に依り、当に釈像の尺寸王身なるを造るべし。此の願力を蒙りて、病を転じ寿を延べ、世間に安住せんことを。若し是れ定業にして以て世に背かば、往きて浄土に登り早く妙果に昇らんことを。二月二十一日癸酉、王

后即世し、翌日、法王登遐す。癸未年(推古三十一年(623))三月中に、願いの如く釈迦尊像並びに侍及び莊嚴具を敬い造り竟んぬ斯の微福に乗じ、道を信ずる知識は、現在安隱(あんゐん)に、生を出でて死に入らば、三主に随い奉りて、三宝を紹隆し遂に彼岸を共にせんことを。六道に普遍ねき法界の含識は、苦縁を脱するを得て、同じく菩提に趣かんことを。司馬鞍首止利仏師をして造らしむ。」とある。若し薬師像を斑鳩寺の本尊とするならば、聖徳太子とその母と妃をとぶらうための釈迦三尊は、金堂とは別の堂の仏像の可能性もあり、後に法隆寺は聖徳太子信仰の寺に変質して金堂の本尊になったとの説もある。(大橋一章氏ほか)

因みに、「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」には、丁卯年推古十五年(597)に、推古天皇と聖徳太子が用明天皇はじめ代々の天皇のために、法隆寺問寺と天王寺・中宮尼寺・橋尼寺・蜂丘寺・池後尼寺・葛城尼寺を造ったとある。又、天寿国繡帳の銘文によれば、欽明天皇は蘇我稻目の女堅塩姫を聚って太后とし、用明天皇と推古天皇を生み、又、太后の妹の小姉君を后として、穴穂部間人公主を生んだ。欽明の子敏達天皇は異母妹の推古を太后とし尾治王を生んだ。用明天皇は異母妹の穴穂部間人公主を太后として、聖徳太子を生んだ。(聖徳太子は)尾治の大王の女の橋大女郎を后とした。辛巳年推古二十九年(591)十二月二十一日の夕方、穴穂部間人母王が崩じ、明年推古三十年(622)二月二十二日の夜半に太子が崩じた。とあり、橋大女郎は大王(太子)が母王と約束したかのように逝っ

たことを悲嘆し、大王(太子)の世間虚仮、唯仏是真の言葉から察して天寿国の中に生れておいでであるうと思ひ、祖母の推古天皇に頼んで、図像によって大王(太子)の往生の状を觀ようとした。そこで推古天皇は、采女たちに命じて繡帳二張を造らせた。下図を描いたのは東漢末賢・高麗加西溢・漢奴加己利で、総監督は掠部秦久麻であったという。天寿国図は阿弥陀淨土図ではないかともいふ。因みに太子の忌日は「書紀」では二月五日である。

(4) 法隆寺の戊子年銘の釈迦三尊像は、推古三十四年(626)に薨じた蘇我馬子追善のものとされる。銘文は「戊子年(推古三十六年(628)十二月十五日朝風文(父か)將其宰濟師慧灯為嗽加大臣誓願敬道釈迦佛像以此願力七世四恩六道四生俱成正覺」とあり、傍点部分は意味不明である。嗽加は巷可・蘇我である。因みに「上宮聖徳法王帝説」では馬子は推古三十五年(627)六月に没している。この像も止利式である。

(5) 漢山口直大口は法隆寺金堂四天王の作者の一人と考えられる。この四天王像は天平十九年(747)の「資財帳」には見えない。それぞれ光背(頭光)に刻銘がある。まず広目天の光背銘は「山口大口費上而木開二人作也」とあり、多聞天の光背銘は「薬師徳保上而鐵師羽古二人作也」とあり、山口大口費・木開・薬師徳保・鐵師羽古の作者らしい四人の名がみえる。東野治之氏は、持国天光背の「片文皮臣光」の針書と、多聞天光背の「片文皮臣」の薬研彫風の簡略な彫りの文字から、もう一人の人物を割り出した。〔MUSEUM〕

三八八号、昭和五十八年七月)片は汗、文は久、皮はへであり、「片文皮臣」は「汗久(文)皮臣」で、ウクハノオミまたはウモハノオミである。「日本書紀」欽明五年(654)三月の条所引の「百濟本記」に「遣三石鳥胡跋臣、蓋是臣也」とある。東野氏は直木孝次郎氏の説を引いて、的臣は建内宿弥後裔氏族の一つの葛城曾都毗古を直接の始祖とし、六世紀半ばから末にかけて朝鮮での軍事行動に関係し、他の軍事的伴造氏族と並んで宮廷の警備にあたり、その根拠地は河内・和泉地方で、七世紀以降は衰えた。的臣眞嚙は蘇我馬子の策をうけ、豊御食炊屋姫(推古)の命を奉じて穴穗部皇子の殺害に関与しており、東漢氏の一族である山口大口費とともに軍事外交を専門とする氏族である的臣が、蘇我氏とも近く、聖徳太子関係の造像にも関与したようである。持国天光背は的氏の指揮下に、多聞天光背も的氏の間与によって作られたものと推定される。上宮王家なき後に、どのような氏族が法隆寺関係の造営に関与しているかを示す資料である。

(6) 天智九年(670)に焼失した法隆寺は、寺地を換え、伽藍配置を変えて再建された。西院伽藍の金堂と五重塔を東西に並べる方式は、川原寺に由来するものと思われる。川原寺はあるいは天智天皇が母斉明天皇の為に造ったものかとも考えられ、低火度鉛釉の緑釉を掛けた磚で作った基壇(或は台座か)や、多数の埴仏や、大型の塑像片などから、初唐の影響をうけた最近式の寺院であったと思われる。伽藍配置も、正面に廻廊に連なる中金堂を置き、廻廊で回まれた中

に東に塔、西に金堂を置き、しかも両者を向い合わせるものである。法隆寺の西院は、川原寺の中金堂を省き、金堂と塔の位置を逆にし、金堂を南に向けた配置である。兎に角、金堂と塔とを東西方向に並列する伽藍配置は、おそらく川原寺からはじまるのであり、その中で、中金堂をもつ点に川原寺の独特の位置があるのであって、それは宛も一群の四天王寺式伽藍配置の寺院における飛鳥寺のような位置なのである。再建法隆寺が個々の建築様式には古い要素を残しつつ、四天王寺式の伽藍配置をすてて新しい方式を採ったということ、天智政権と共調しているとも、新しい様式を受け入れているともいえるのである。川原寺創建時の軒丸瓦は複弁八弁蓮華をもち、中房が大きくなり、蓮子も二重にめぐらされ、瓦当の直径も大きく、蓮弁が高く盛り上っているが、これはそっくり法隆寺西院伽藍の創建期のものにもあてはまる。

さて法隆寺金堂であるが、建築の様式・技法からみて、現西院伽藍の中では最も早く造られたとされる。その内陣には、中の間に釈迦三尊像、東の間に薬師像、西の間に阿弥陀像が置かれているが、阿弥陀像は運慶の四男康勝によって、寛喜三年(1231)三月八日から貞永元年(1232)八月五日にかけて作られた。二重宣字形の須弥座の上座もこの時に造られた。十一世紀の「金堂仏像等目録」(「金堂日記」)によれば、西壇(西の間の下座か)の上には十八体の小仏があったという。現在、中の間の釈迦三尊も東の間の薬師如来も二重宣字形須弥座に安置されているが、西の間の阿弥陀の下座も含

めて、それぞれの大きさや形態や比例や裝飾図様が異なっており、制作年代にも差異が考えられている。この点について「奈良六代寺大観」第二巻の法隆寺二(一九六八年、岩波書店)によってみると、中の間の釈迦三尊の台座についていえば、上座と下座と台脚部から成り、上下座とも上框・腰部・下框から成り、上座は上框は二段でその間に請花が入り、下框は三段で一段目と二段目(上から)の間に反花が入る。下座は上框三段で二段目と三段目(上から)の間に請花が入り、下框は三段で一段目と二段目の間に反花が入る。腰部は縦框と鏡板から成る。台脚部は天板と脚と地付枠から成る。框と天板と縦框には黒漆と色漆(朱・緑青・黄)の線描で文様が描かれ、請花・反花・腰部の上下に接する框・鏡板には白土下地に彩色で図様が描かれる。縦框には動物系雲気文、框側面や台脚部天板側面には禽獣文、下座上框一段目の上下面、下座下框二段目および台脚部天板上面には水波文が描かれる。請花と反花は二重蓮弁のうち上層を朱、下層を白群で描き、腰部上下に接する框には白土上に朱で縦に平行線を入れて、蓮花の蕊をあらわす。腰部の鏡板についていえば、下座正面には下方に三個の山と上方左右に大小二体の飛天、下座両側面には四天王各二軀づつと侍者風の小型人物と下方に山岳・樹木・水波、下座背面には下方に三山と上方左右に正坐した人物二人づつ?、上座の正面には下方に三山、両側面と背面には下方に岩山と樹木がみられる。台座の漆絵の部分は、中国の漢魏以来の裝飾意匠の伝統を示し、釈迦三尊の造立当時のものと考えられることも可能だ

という。この須弥座と近い関係にあるのが阿弥陀像の下座と薬師像の下座であって、これらはいづれも釈迦三尊の台座と同じく腰部の上方をややすばませ、框座の四辺側面を腰部に向って斜に截り落し、文様は色漆三種を用いて線描で描き、雲気文と水波文を主体とし、鏡板の下辺には岩山・樹木を配する。阿弥陀像の下座は、雲気唐草文・水波文・雲気文を配し、鏡板正面には下方に山、上方に飛天、両側面には四天王が二軀づつと邪鬼・小型人物、背面には下方に三山と上方に群樹が描かれる。請花の下に蕊を描く框をつくらない。これらの図様は釈迦三尊のものより新しいが薬師像のものよりやや古いという。薬師像下座は阿弥陀像下座と同様、請花の下に蕊を描く框を造らない。雲気唐草文・水波文・水草文を配し、水草文については橘夫人厨子光屏に似たものがあるという。鏡板正面は僧形人物と樹木？、両側面は横向きの獅子？、背面は飛天と山岳？である。これらは中の間のものよりやや形式化しており、むしろ西の間の下座に近いという。東の間の薬師像の上座は、上框一段・腰部・下框三段から成り、下框の一段目と二段目に反花が入るが、上框には請花を設けていない。しかし上框の接合の仕方からみて、上框は他の部分とは別手のものを接合したものとと思われる。框の縁は腰部に向って斜めに截り落されている。裝飾文様は下框下二段の上面の水波文と、縦框・下框側面の唐草文であるが、共に橘夫人厨子に記載された宮殿像二具のうちの一つと思われるが、頭眞の「聖徳

太子伝私記」に橘大夫人（光明皇后母）の造る所とある。天蓋付長方形箱形龕を宣字形須弥座（及び台脚）に載せたもので、須弥座は上框二段と請花・腰部・下框三段（一段目と二段目の間に反花）構成で、薬師像や阿弥陀像の下座と同じ構成である。ただし框の縁を腰部に向って截り落して居らず、垂直である。腰部腰板には白土地に彩色で正面に供養図、側面に僧坐図、背面に蓮華化生菩薩図が描かれ、桃色の濃い隈取りは、初唐画が西域から摂取した凹凸画法に連なるものという。また框に施された波状唐草文は半パールメットを主体に渦巻系尊や扇形花を加えたもので、茎に巻きつく若葉や葡萄唐草文といった新しい要素も見られる。これらの諸特色と他の部分の特色を加えて判断すると、中国でいへば則天武后期の特色を具えており、七世紀後半もしくは七世紀末の制作と思われる。因みに阿弥陀像の上座は、鎌倉初期のものであるが、上框二段・腰部・下框三段から成り、上框に請花がなく、下框一段目と二段目の間に反花が入り、框の縁は垂直である。

金堂内陣には東の間、中の間、西の間にそれぞれ天蓋が取付けられている。東の間の薬師像の天蓋は、屋根上の墨書銘により、天福元年（933）に作られたものである。中の間と西の間の天蓋は、構造・形式・技法・文様とも殆んど差がない。これらはいづれも、上下二重の葺返しをもつ屋根形天蓋で、葺返し板の表に半パールメット文様を描き、軒先には飾り板をつけ、その下端から珠網（木製）をつり下げる。上下葺返し板の上に木製の飛天と銅製の飾り金具をつ

け、垂幕板の側面に鳳凰をつける。天蓋内部は組入天井で、各格子に蓮華文を配し、支輪板には蓮唐草を描き、垂幕板の内側は長方形に区切って遠山と群樹から成る茸状の山岳文を描く。中の間と西の間の天蓋を比べると、前者が古く、後者では文様の崩れがみられる。又、両者をほぼ同巧の橋夫人厨子の屋根と比較すると、中・西天蓋の方が古く、これらは法隆寺金堂の建築自体の天井・支輪・小壁の文様と対応し、両者が同一工房における近い時期の作であると考えられる。又、天蓋の葺返し板につけられた飛天についていえば、面長で角張った輪郭の顔のものと、丸味が加わり可憐な感じのするものと二種あるが、前者が中天蓋に後者が西天蓋に配当されていた可能性があるという。

以上のような「六大寺大観」の観察からすれば、現金堂は、ほぼ釈迦三尊像を中尊とすべく整えられたことが推測される。しかし創建当初の斑鳩寺にあってもこれと同じ状態であったとは考え難い。

現金堂は、西院伽藍のうちでは様式・技法ともに最も古く、再建に際しては最も早く完成したと推測されている。その時期は、たとえば、大化四年に許世徳陀古によって施入された食封三百戸が停止された天武八年(683)ごろ、遅くとも仁王会が行われた持統七年(693)までには完成していたとする。金堂の壁画は、東大壁に釈迦浄土、北西大壁に弥勒浄土、北東大壁に薬師浄土、西大壁に阿弥陀浄土を配して釈迦・弥勒の南北軸と薬師・阿弥陀の東西軸とを斜

めの交叉させて配置しているものと推測され、その他に(小壁に)観音・勢至、十一面観音・聖観音、普賢・文殊、二軀の半跏像をそれぞれ左右対照に配したものである。暈染法や纏綯彩色から見て、高宗―則天武后朝の初唐様式の影響下にあり、第七次遣唐使の帰朝した慶雲元年(704)以前のものと考え、橋夫人厨子の絵よりも古く、持統・文武朝の制作との説もある。

五重塔は様式・技法から金堂より後のものであるが、仏舍利は飛鳥寺・四天王寺、中宮寺・法輪寺などと同じく基壇表面から十尺ほどの地中の心礎に納入し、心柱を掘立てている。再建と時期を同じくする川原寺や近江の崇福寺では基壇上面から二〜三尺と浅く、その点では古式を保っている。しかし舍利容器は、「法王帝説」にいう天武元年(682)の山田寺のものや、天智七年(688)創建の崇福寺のものに近く、卵形容器の唐草文は、八世紀以降に盛行する蔓唐草の先例と見られ、雲気文系唐草の系統から完全に脱却したとされる。又、小型の海獣葡萄鏡も納入されており、初唐期のものとされる。いづれにしても五重塔は初層の塑像群像が作られた和銅四年(711)ころ完成していることは確かなのであるが、この須弥壇は二度目の改造かと推定され、心柱が地面境で腐朽したところに板石を周囲から挿入する工事に伴うもので、そうすると完成は和銅四年からかなり溯ることになる。塔の建立後、須弥壇や須弥山は作られたが、壁や天井を造らない期間が相当長くつづいたことが柱の風蝕のあとから推測されている。心柱の腐朽といい、初層柱の風蝕とい



い、これらの年月を推定すると五重塔の着工はかなり早くなければならぬという。法起寺は、聖徳太子が法華経を講じた岡本宮の後身で、推古十五年(607)に太子が建立した七寺のうちの池尻尼寺にあたるが、顕真の「聖徳太子伝私記」所収の「法起寺塔露盤銘文」(実物は存在しない)によれば、推古三十年二月二十二日に薨じた聖徳太子は、山背大兄王に遺言して岡本宮を寺とし、大和の田十二町と近江の田三十町を施入し、舒明天(638)に福亮僧正により金堂と本尊の弥勒像が完成し、天武十三年(685)、恵施僧正が宝塔を構立し、慶雲三年(700)三月に露盤を作った。現存の三重塔はこの時のものである。伽藍配置は、法隆寺西院の塔と金堂の位置を逆にしたもの(塔と金堂が向きあう可能性もある)で、寺域は大和条里の地割に合致している。しかし前身の遺構があり、その南北軸は磁北より約二十度西偏しており、七世紀前半の瓦が出土する。ところで法起寺の三重塔は、法隆寺五重塔の初層・三層・五層をつないだもので、共に高麗尺によっている。心礎は基壇上に据えられ、八角形の作り出しがあり、その中央近くに舍利孔をつくる。法起塔を勘案すれば、法隆寺五重塔の着工は天武十三年(685)以前ということになり、技法的・様式的にかなり差があるとされる金堂の造営期に平行することにもなる。法輪寺の三重塔(昭和十九年焼失、再建)も法起寺のものと大体同じで、法隆寺五重塔を溯り得るものではない。法輪寺は法隆寺西院伽藍と同じく、塔を西に金堂を東に置いていた。ところがここには同じ法隆寺式伽藍配置ながら、単弁

八弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦を伴う古い遺構があり、塔の心礎は基壇表面より二、三米下に据えられていた。また寺域は磁北より約十度西偏している。「聖徳太子伝私記」所引の「御井寺勸録寺家資財雜物等事」に、推古三十年(622)に太子の病氣平癒を祈って山背大兄王とその子の弓削王が発願したという。「上官聖徳太子伝補闕記」(十世紀初頭以前)や「聖徳太子伝曆」では、斑鳩寺の焼亡後に百濟の開(聞)法師・円明法師・下水新物(下水君雜物)の三人が造営したという。顕真は「聖徳太子伝私記」の注記に、大施主は膳妃であるという。膳部氏は上宮王家を支えた軍事外交氏族であり、法輪寺の檀越とするのであるが、確かなことは不明である。

法隆寺の建築は、膨らみのある丸柱・皿斗をもつ大斗・雲斗雲肘木を用いる組物・高麗尺の使用など、独自の古い伝統を保持しつつ、再建の途上に於てはそれを次第に変更し、改良し、内部の装飾や施設ではむしろ新しい動向を積極的に摂取したが、恐らく彫刻史においても、同じような傾向が見られるであろう。又、四天王式伽藍配置をもつ中宮寺を含む上宮王家ゆかりの寺々に多くの遺品が残っており、伝統様式への強い求心力も保たれていたであろう。上宮王家ゆかりの氏族(多くは渡来系の)は、その実力(技術力・財力)を発揮して、新旧様式を融合しつつ、当時の政府(政権)とも協調して、太子の遺跡の保存・再興に努めたものと思われる。又一方で、聖徳太子の政策を基本とする各時代の政府(政権)も、それに対して有形無形の援助を惜しまなかったものと推測される。法隆寺西院

伽藍にみられる建築様式の不統一（変遷？）や、金堂内の仏像排列や荘嚴具の設置の不統一などに、以上述べたような法隆寺をはじめとする上宮王家ゆかりの寺々の保持・再興の実情が窺われるものと思われる。

（未完）